

令和2年度NICU等入院児実態調査

1. 目的
都内周産期母子医療センター等のNICU等入院児の現状や支援体制を把握し、長期入院児の円滑な在宅療養等への意向に向けた全都的な取り組みの検討に用いる基礎資料とする。
2. 調査対象施設（令和2年10月1日時点）
(1) 都内の総合及び地域周産期母子医療センター 28施設
(2) 都が指定する周産期連携病院のうちNICU病床を有数施設 3施設
3. 調査項目
(1) 調査対象施設の体制
NICU入院児支援コーディネーターの配置、在宅移行支援準備の体制、NICU等退院児の受入体制、NICU等退院児のレスパイトの体制
(2) 長期入院児の現状
(3) NICU等退院児の状況
4. 調査基準日
令和2年10月1日
5. 調査方法
郵送・メールにより自記式調査用紙を送付し、郵送又はメールにて回収
6. 調査回答数
31施設（回収率100%）

令和2年度NICU等入院児実態調査の結果（速報値）

《対象施設の体制》

- ・NICU入院児支援コーディネーターを配置している施設は27施設（87.1%）へ増加した。
- ・在宅移行訓練を実施している施設は30施設（96.8%）で、院内27施設（90%）、外泊15施設（50%）であった。
- ・小児等在宅移行支援指導者養成研修は13施設（41.9%）で受講し、そのうち5施設（36.5%）で小児在宅移行支援パスを作成していた。

《長期入院児の現状》

- ・NICU・GCU・小児科等へ90日以上入院児している児は70人へ減少した。
- ・NICU・GCUに90日以上入院している児は57人へ減少した。
- ・GCUへ1年以上入院している児は7人で、NICUはいなかった。

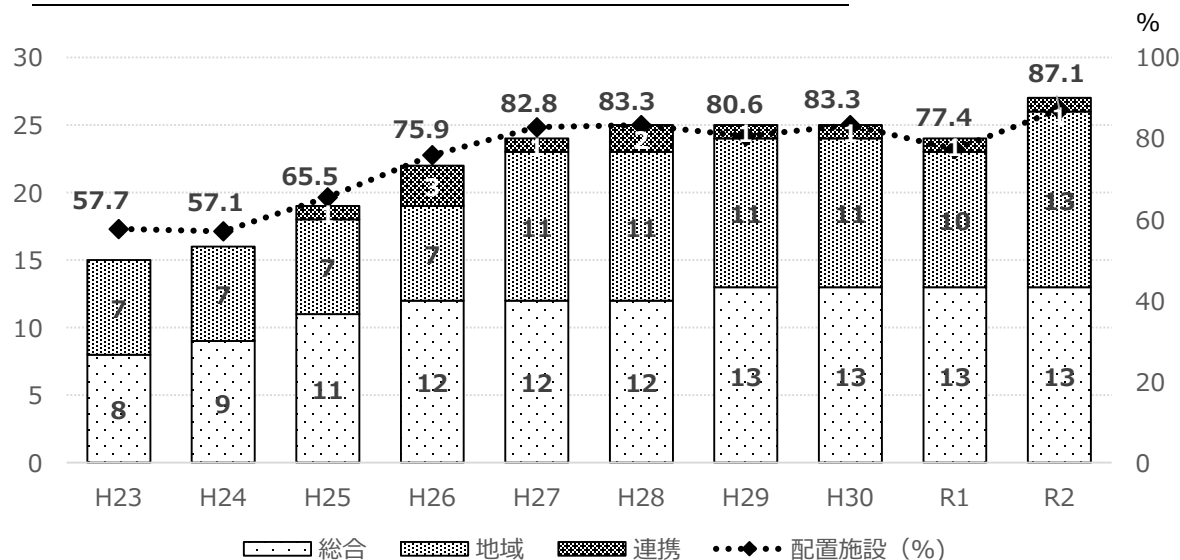
《NICU等退院時の状況》

- ・NICU等から退院した医療・介護ニーズのある児で在宅へ移行した児は217人で横ばいであった。
- ・退院時の医療デバイスは、酸素吸入等が最も多く約8割、次いで経管栄養が約4割、呼吸器管理は2割弱であった。人工肛門や腸瘻等が増加した。
- ・在宅移行訓練は8割以上の児に実施していた。訓練場所は、約8割が院内、外泊は約1割であった。院内及び外泊訓練を実施した児は1割弱であった。
- ・退院時に導入したサービス・資源は、緊急入院先確保、保健所・保健センター、訪問看護の順で多く、昨年より訪問看護、訪問リハビリが増加し、レスパイト確保、ヘルパー等が減少した。

令和2年度NICU等入院児実態調査～施設の体制～

1. NICU入院児支援コーディネーターの配置

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
配置施設数	15	16	19	22	24	25	25	25	24	27
配置施設 (%)	57.7	57.1	65.5	75.9	82.8	83.3	80.6	83.3	77.4	87.1
総合	8	9	11	12	12	12	13	13	13	13
地域	7	7	7	7	11	11	11	11	10	13
連携	0	0	1	3	1	2	1	1	1	1

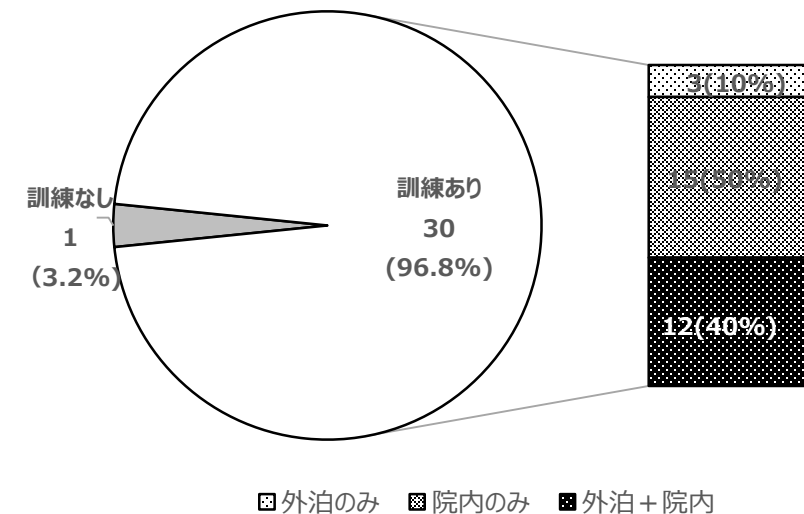


2. 在宅移行支援体制

- ・在宅移行訓練を実施している施設は30施設（96.8%）で、院内のみ15施設（50%）、外泊のみ3施設（10%）、院内及び外泊12施設（40%）であった。
- ・施設によっては、人工呼吸器と気管切開がある児は小児科病棟で付添い外泊訓練を実施、在宅療養中の退院時家族を見学する機会を設ける等工夫し対応していた。

	施設数	割合
訓練あり	30	96.8%
訓練なし	1	3.2%
合計	31	100%

	施設数	割合
院内のみ	15	50%
外泊のみ	3	10%
院内+外泊	12	40%
合計	30	100%

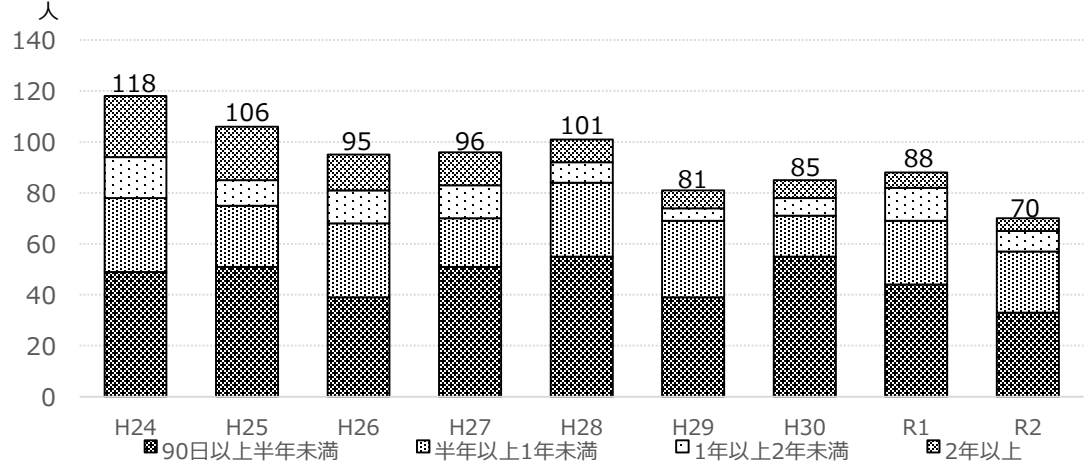


令和2年度NICU入院児等実態調査速報値～長期入院児の状況～

1.入院期間別にみた長期入院児数の推移

- 令和2年10月1日時点でNICU・GCU・小児科病棟へ90日以上入院している児は70人であった。
- 入院期間90日以上半年未満は33人（47.1%）、半年以上1年未満は24人（34.3%）、1年以上2年未満は8人（11.4%）、2年以上は5人（7.1%）であった。
- 令和2年は平成24年と比べて4割減少した。特に1年以上の長期入院児数が減少した。

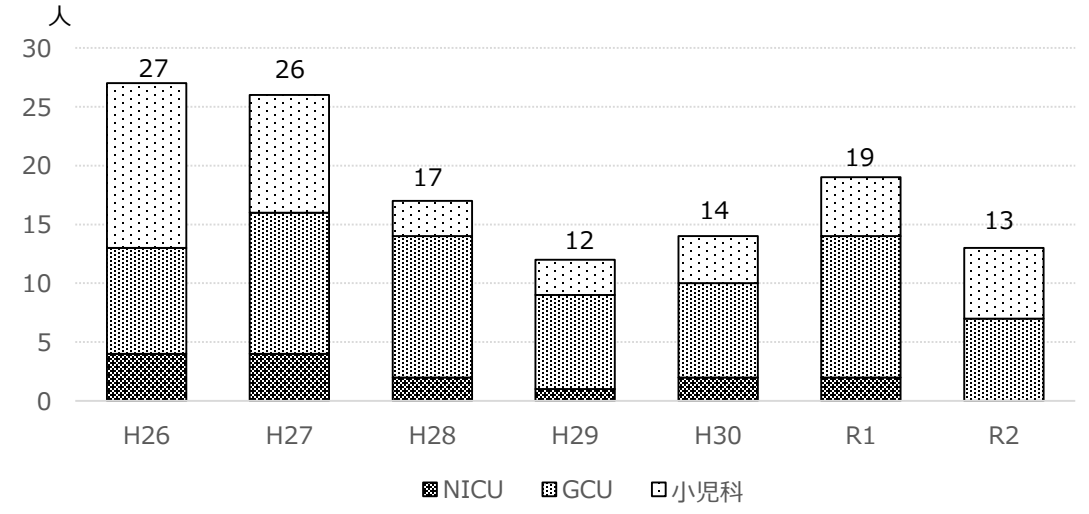
	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
90日以上半年未満	49	51	39	51	55	39	55	44	33
半年以上1年未満	29	24	29	19	29	30	16	25	24
1年以上2年未満	16	10	13	13	8	5	7	13	8
2年以上	24	21	14	13	9	7	7	6	5
合計	118	106	95	96	101	81	85	88	70



2.1年以上の長期入院児数の入院病棟別の推移

- 1年以上の長期入院児数は、令和2年は平成26年と比べ半減した。
- NICUへ1年以上入院している児は令和2年はいなかった。

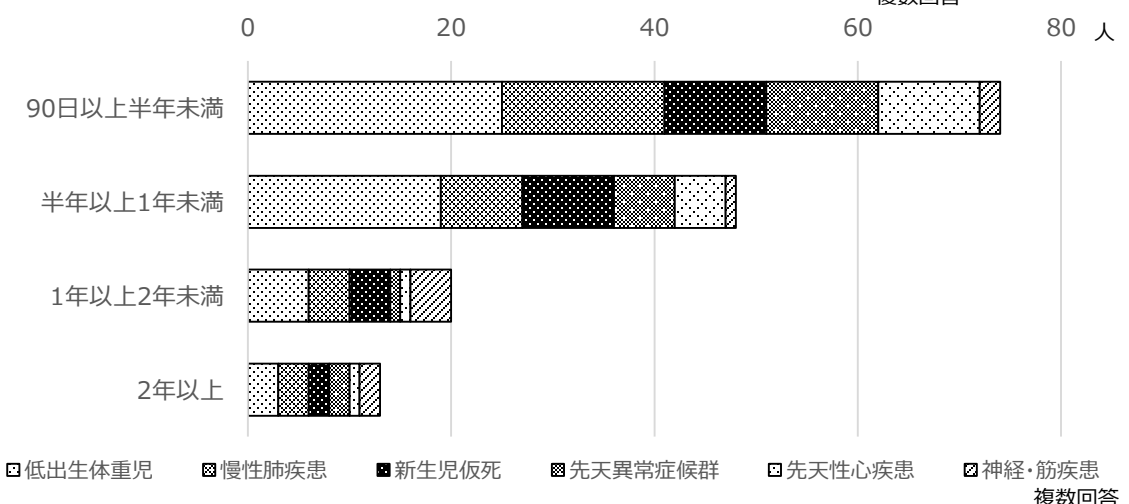
	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
NICU	4	4	2	1	2	2	0
GCU	9	12	12	8	8	12	7
小児科	14	10	3	3	4	5	6
合計	27	26	17	12	14	19	13



3.主な原因疾患

- 低出生体重児が最も多く53人（75.7%）で、次いで慢性肺疾患32人（45.7%）であった。
- 入院期間別に見た主な原因疾患はいずれも低出生体重児が最も多く、次いで、半年以上1年未満では新生児仮死、1年以上2年未満では慢性肺疾患、新生児仮死及び神経・筋疾患、2年以上では慢性肺疾患であった。

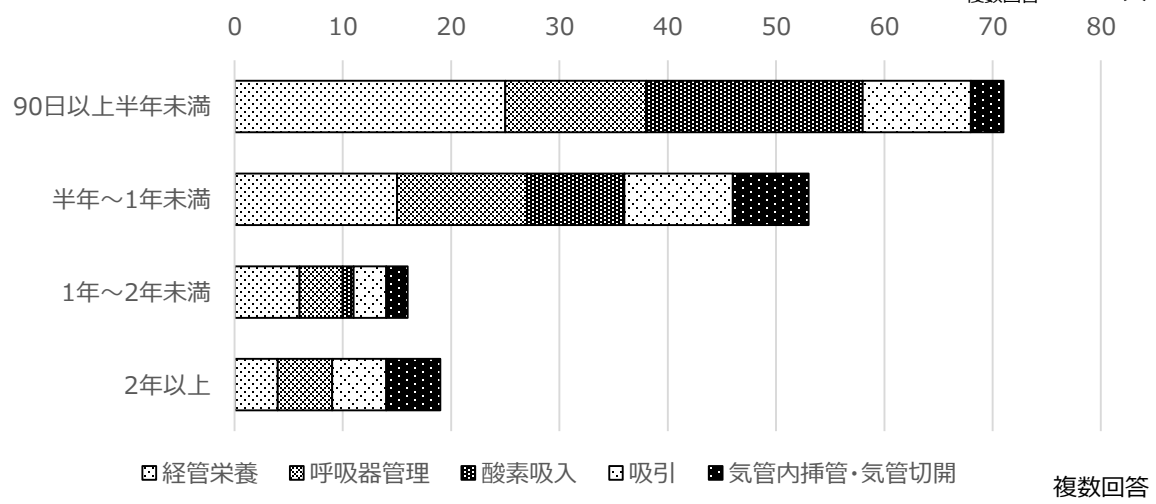
	90日以上 半年未満	半年以上 1年未満	1年以上 2年未満	2年以上	合計	
入院児数	33	24	8	5	70	100%
低出生体重児	25	19	6	3	53	75.7%
慢性肺疾患	16	8	4	3	31	44.3%
新生児仮死	10	9	4	2	25	35.7%
先天異常症候群	11	6	1	2	20	28.6%
先天性心疾患	10	5	1	1	17	24.3%
神経・筋疾患	2	1	4	2	9	12.9%



4.医療的ケアの状況

- 経管栄養が最も多く50人（71.4%）、次いで呼吸器管理34人（48.6%）、酸素吸入30人（42.9%）等であった。
- 入院期間別にみると入院期間が短い程、酸素吸入の割合が高く、入院期間が長い程、呼吸器管理の割合が高い傾向にあった。

	90日以上 半年未満	半年以上 1年未満	1年以上 2年未満	2年以上	合計	
入院児数	33	24	8	5	70	100%
経管栄養	25	15	6	4	50	71.4%
呼吸器管理	13	12	4	5	34	48.6%
酸素吸入	20	9	1	0	30	42.9%
吸引	10	10	3	5	28	40.0%
気管内挿管・気管切開	3	7	2	5	17	24.3%



5.退院できない理由

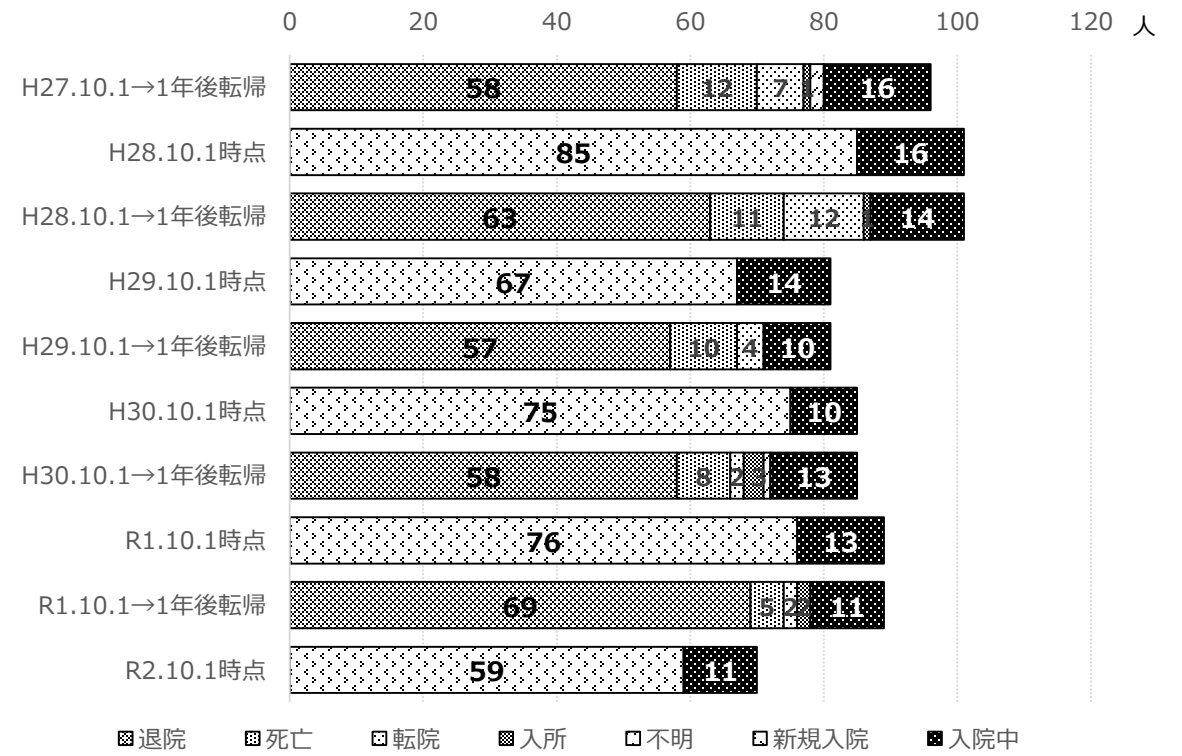
- 「病状が不安定」が60人(85.7%)と最も多く、次いで「家庭環境・経済」及び「療育環境」が各12人(17.1%)であった。
- 入院期間が1年以上になると入所待ちの占める割合が多くなり、長期化する程、要因は多様であった。

	90日から半年未満	半年から1年未満	1年から2年未満	2年以上	合計
入院児数	33	24	8	5	70
病状不安定	29	23	6	2	60
施設入所待ち	0	2	3	2	7
中間施設としての小児科受入体制不十分	0	1	1	1	3
レスパイト先確保問題	1	0	1	3	5
家族の受入不良	4	2	1	2	9
家庭環境、経済的理由	5	2	2	3	12
家族の医ケア技術習得等療養環境未整備	8	2	0	2	12
その他	2	0	0	1	3
	87.9%	95.8%	75.0%	40.0%	85.7%
	0.0%	8.3%	37.5%	40.0%	10.0%
	0.0%	4.2%	12.5%	20.0%	4.3%
	3.0%	0.0%	12.5%	60.0%	7.1%
	12.1%	8.3%	12.5%	40.0%	12.9%
	15.2%	8.3%	25.0%	60.0%	17.1%
	24.2%	8.3%	0.0%	40.0%	17.1%
	6.1%	0.0%	0.0%	20.0%	4.3%

複数回答

6.長期入院児の転帰の推移

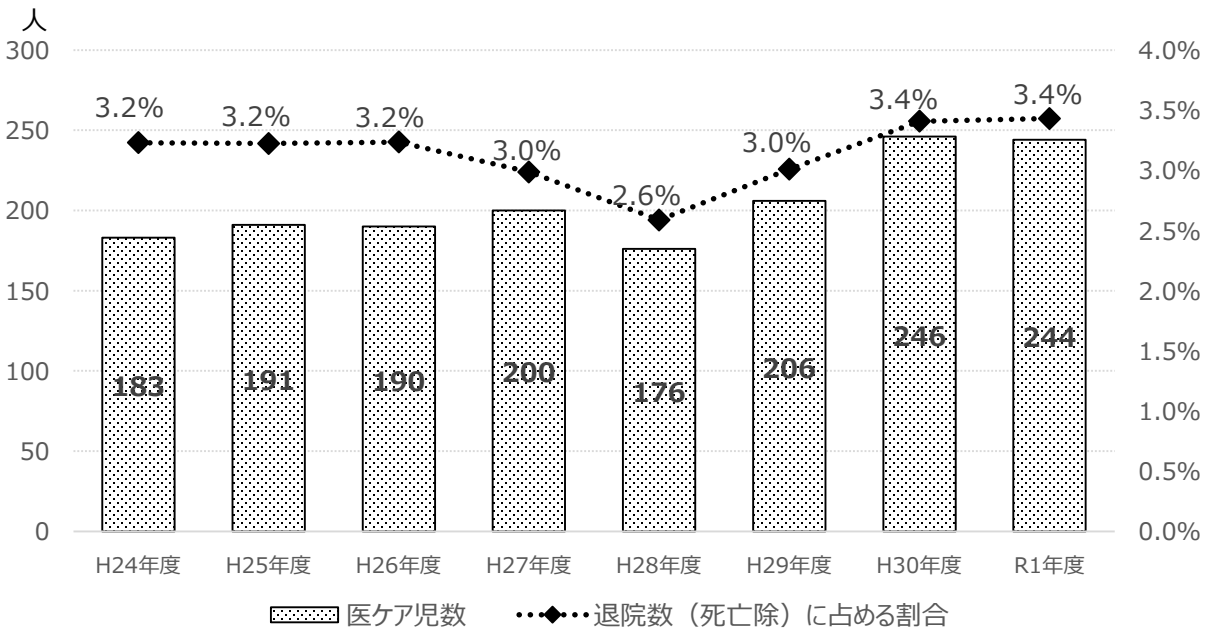
- 退院する児の割合はH27年は58人(60.4%)であったが、年々増加し、R1年69人(77.5%)であった。
- 引き続き入院中の児の割合はH27年は16人(16.7%)であったが、R1年は11人(12.4%)と減少した。
- 新たな長期入院児数は、H28年は85人であったが、年々減少し、R2年は59人であった。



令和2年度NICU等入院児実態調査速報値～医療・介護ニーズのある児の状況～

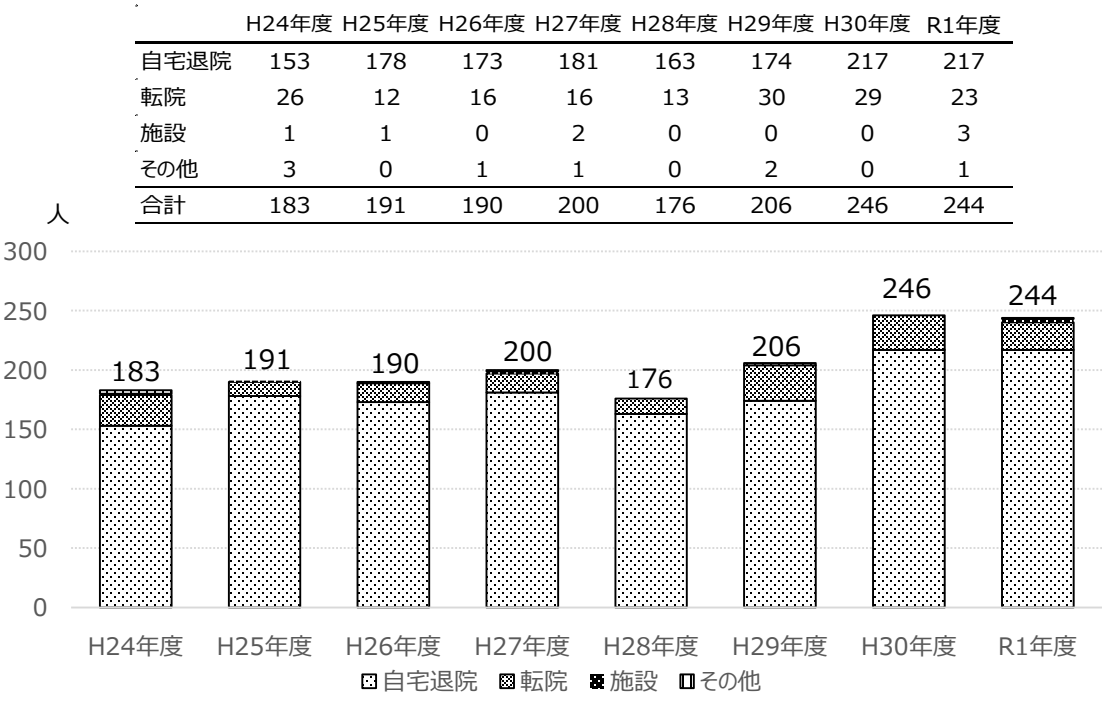
1.医療・介護ニーズのある児の数と退院に占める割合の推移

- 令和元年度にNICU等から退院した児は7,183人(不明除く)で、退院先は自宅6,832人(95.1%)、転院255人(3.6%)、施設24人(0.3%)、死亡72人(1.0%)であった。
- 退院児(死亡退院を除く)のうち医療・介護を要する児は244人(3.4%)で、平成28年度以降増加していたが、令和元年度は前年とほぼ同数であった。



2.退院先について

- 自宅へ退院した児が最も多く217人(88.9%)、次いで転院23人(9.4%)であった。
- 経年的にみると自宅へ退院する児の割合は90%前後で推移し、退院児数は平成28年度以降増加している。



3.在宅へ移行した児の状況

(1) 在胎週数と出生時体重

- 在胎週数37～41週で2,500g以上の児が61人（28.1%）で最も多く、次いで在胎週数24～27週で500～1,000g未満の児が41人（18.9%）、在胎週数37～41週で1,500～2,500g未満の児34人（15.7%）等であった。
- 出生体重及び在胎週数の最小値、中央値、平均値、最大値は表のとおりであった。

	在胎週数					合計	割合
	22-23W	24-27W	28-33W	34-36W	37-41W		
出生時体重							
500g未満	5	8	0	0	0	13	6.0%
500～1,000g未満	10	41	4	0	0	55	25.3%
1,000～1,500g未満	0	3	12	5	3	23	10.6%
1,500～2,500g未満	0	0	10	17	34	61	28.1%
2,500g以上	0	0	0	4	61	65	30.0%
合計	15	52	26	26	98	217	100%
	6.9%	24.0%	12.0%	12.0%	45.2%	100%	

	出生体重(g)	在胎週数
最小値	260	22
中央値	1,770	36
平均値	1,796.1	32.9
最大値	3,863	41

(2) 退院時月齢及び体重

- 3～6か月未満で3,500g以上が最も多く57人（26.3%）、次いで3～6か月未満で2,500～3,500g未満39人（17.8%）、6～12か月未満で3,500g以上31人（14.3%）であった。
- 退院時の平均月齢、最大月齢、中央値は表のとおりであった。

	退院時体重			合計	割合
	1500-2500g未満	2500-3500g未満	3500g以上		
退院時月齢					
1M未満	1	5	0	6	2.8%
1-3M未満	3	27	32	62	28.6%
3-6M未満	7	39	57	103	47.5%
6-12M未満	0	7	31	38	17.5%
1歳以上	0	0	8	8	3.7%
合計	11	78	128	217	100%
	5.1%	35.9%	59.0%	100%	

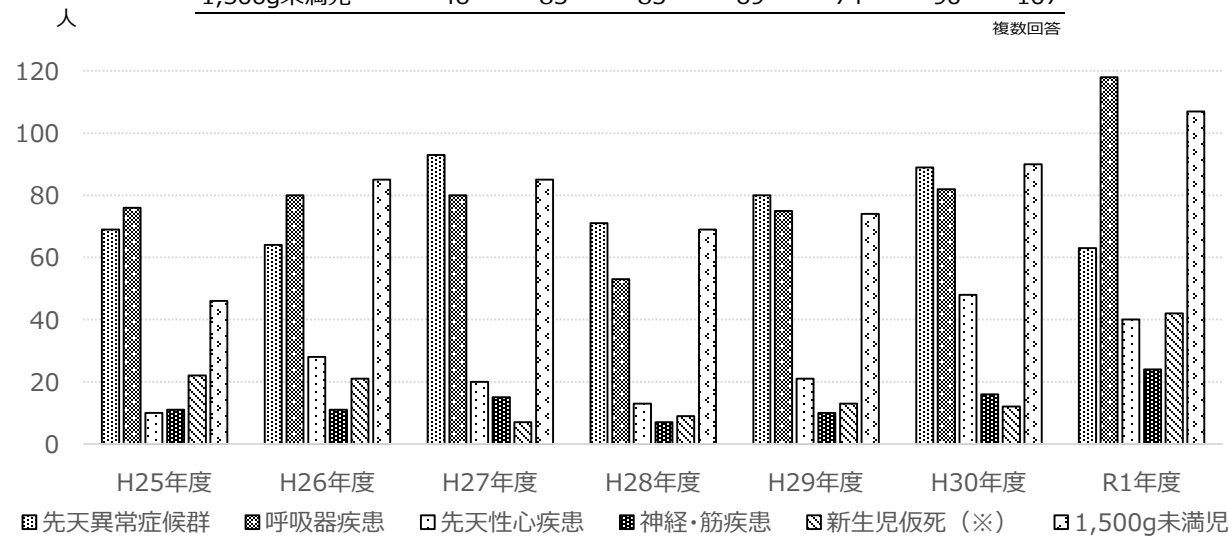
退院時の平均月齢、最大月齢、中央値

	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度
平均月齢	5.17	4.46	3.97	4.9	4.73	4.15	4.16
最大月齢	55	21	24	35	43	27	23
中央値	4	4	4	4	4	3	4

(3) 疾患名

- 慢性肺疾患が最も多く118人（48.4%）、次いで極低出生体重児107人（43.9%）、先天異常症候群63人（25.8%）であった。
- 経年的にみると慢性肺疾患、極低出生体重児が増加している。

	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度
先天異常症候群	69	64	93	71	80	89	63
呼吸器疾患	76	80	80	53	75	82	118
先天性心疾患	10	28	20	13	21	48	40
神経・筋疾患	11	11	15	7	10	16	24
新生児仮死（※）	22	21	7	9	13	12	42
1,500g未満児	46	85	85	69	74	90	107

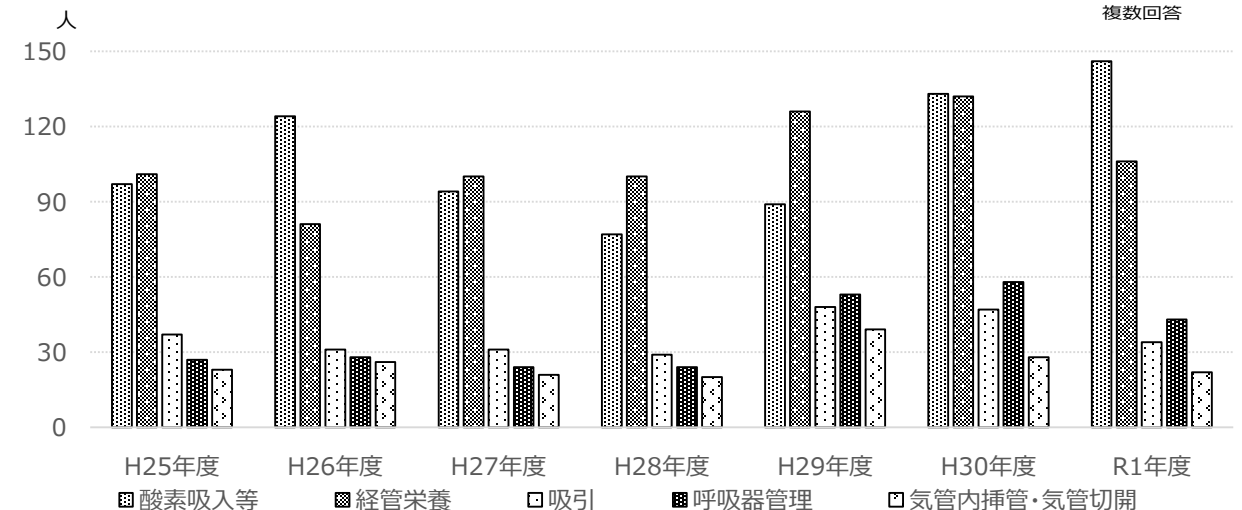


※H25～H30年度は脳性麻痺、R1～新生児仮死へ変更

(4) 医療デバイスの状況

- 令和元年度は、酸素吸入等が最も多く135人（62.2%）、次いで経管栄養84人（38.7%）、呼吸器管理33人（15.2%）等であった。
- 呼吸器管理を必要とする児は平成28年度以降増加していたが、今年度は横ばいであった。
- 人工肛門や腸瘻等が増加しており、医療デバイスは多様化している。

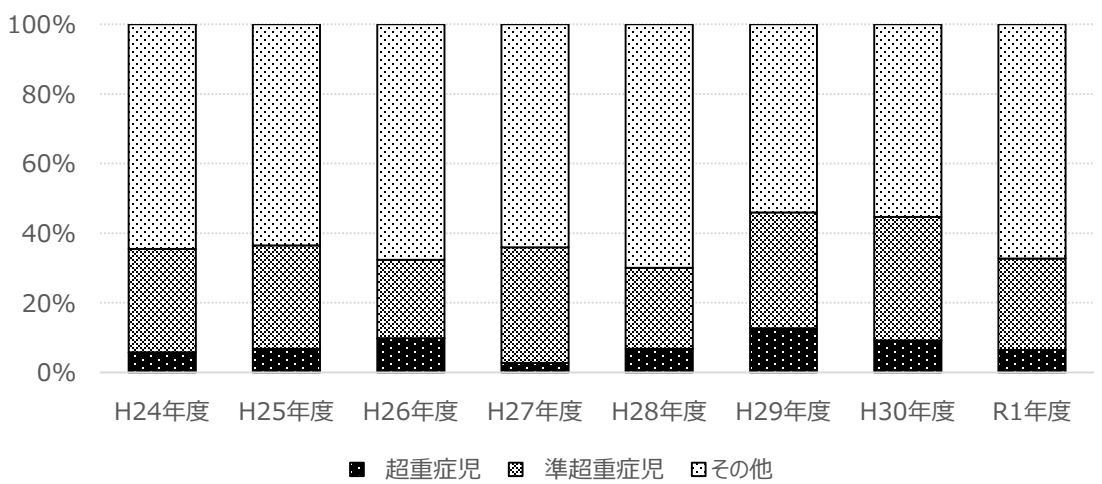
	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度
人工呼吸器	17	19	23	18	20	42	42	33
気管内挿管・気管切開	18	17	21	17	15	29	21	16
酸素吸入又はSpO2 90↓	94	97	107	87	74	78	117	135
吸引	27	34	27	26	26	39	42	26
経管栄養	75	93	73	86	91	103	110	84
人工肛門	4	7	7	8	10	9	13	16
持続注入	4	0	1	4	6	2	6	7
腸瘻	-	-	-	3	1	1	7	4



(5) 重症度

- 令和元年度は、超重症児21人（8.6%）、準重症児68人（27.9%）、その他155人（63.5%）であった。
- 超重症児は20人前後、約10%、準重症児は60人前後、約30%で推移している。

	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度
超重症児	21	16	22	8	14	31	27	21
準重症児	62	63	45	72	41	64	94	68
その他	100	112	123	120	121	111	125	155
合計	183	191	190	200	176	206	246	244

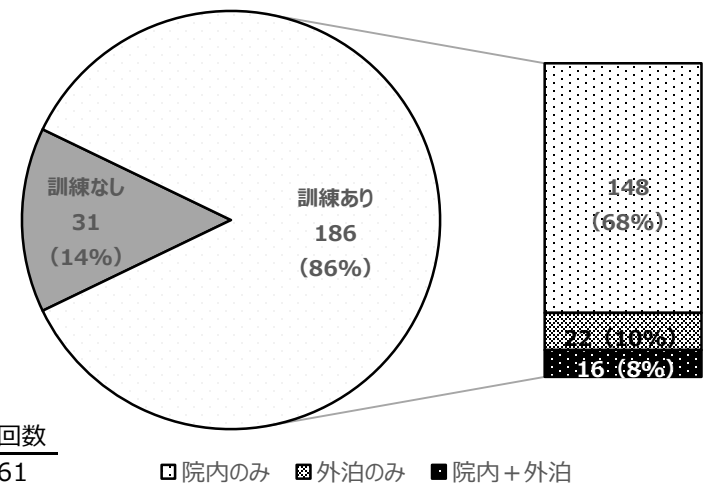


(6-1) 在宅移行訓練の実施状況

- 訓練を実施した児は186人で8割以上であった。訓練の場所は、院内のみが最も多く148人（79.6%）、外泊のみ22人（11.8%）であった。院内及び外泊訓練を実施した児は16人（8.6%）であった。
- 訓練の平均回数は、院内2.61回、外泊1.32回であった。

訓練あり	186	85.7%
訓練なし	31	14.3%
合計	217	100.0%

院内のみ	148	79.6%
外泊のみ	22	11.8%
院内+外泊	16	8.6%
合計	186	100.0%



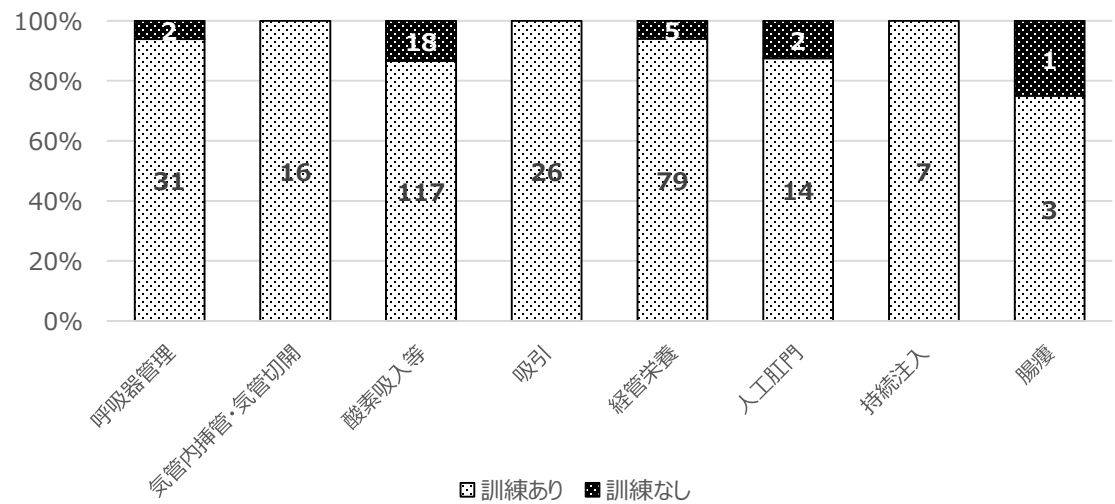
	最小回数	中央値	最大回数	平均回数
院内訓練	1	1	30	2.61
外泊訓練	1	1	3	1.32

(6-2) 在宅移行訓練の実施状況

- 気管内挿管・気管切開、吸引及び持続注入のある児は全員訓練を実施していた。
- 在宅移行訓練を実施し、ない理由は、必要なし、面会時間が長く手技に問題なし、家族希望なし、他児の世話等で時間調整困難、理解力良好、医療従事者等であった。

	全体	呼吸器管理	気管内挿管・気管切開	酸素吸入等	吸引	経管栄養	人工肛門	持続注入	腸瘻
訓練あり	186	31	16	117	26	79	14	7	3
訓練なし	30	2	0	18	0	5	2	0	1
合計	216	33	16	135	26	84	16	7	4

※複数回答 ※不明除く



(7) 退院時に導入したサービスや資源

- 導入したサービスや資源は、緊急入院先216人（99.5%）、保健所・保健センター182人（83.9%）、訪問看護179人（82.5%）等であった。
- 昨年度より、訪問看護、訪問リハビリの導入が増加し、レスパイト確保、ヘルパー等が減少した。

